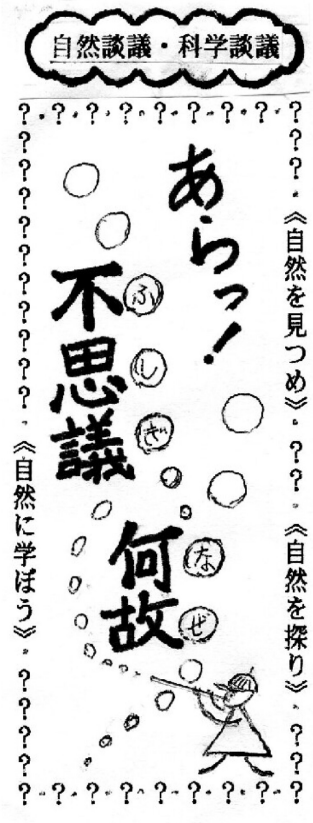


NO、34（通算34）

絵・文・題字
渋谷　一夫

富士山の謎 (4)
「丸尾（まるび）って」、何？

富士山に関する書籍を調べていると、「丸尾」という言葉があちこちに出てくる。青木ヶ原丸尾・剣丸尾など。「丸尾」って何のことだろうと不思議に思い調べてみた。どうやら新しい溶岩流のことらしい。
そこで今月は、富士山の噴火と「丸尾」の関係を探ってみたい。

富士山は、遠くから見ると実に美しい。だが近付いて見ると、意外とゴツゴツ凸凹あばた面だ。
何故だろう。

岩だらけの山頂

山頂には大きな噴火口がある。直径７００ｍ深さ２００ｍもある。その火口壁の最高点が３７７６ｍの剣ヶ峰だ。山頂から約２４００ｍの五合目までは、草や木が全くない。黒っぽい玄武岩や軽石・火山れきばかりだ。富士講の教典に、「登りてみれば何もなし」とある。その通りだ。

あばた面は側火口

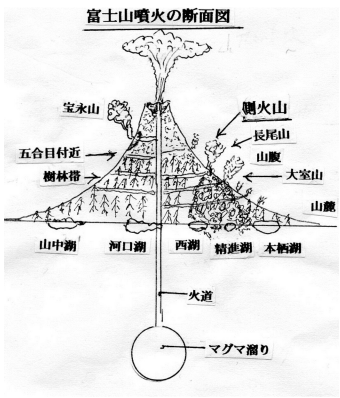
美しく見える山腹も、よく見ると穴だらけだ。富士山の噴火は、山頂からだけではなく山腹からも起こっている。割れ目噴火だ。その火口は、あちこちに散在している。大小60数個もある。
その最大の火口が宝永山の火口だ。１・３ｋｍもある。北西方向には長尾山や大室山がある。その周辺には、無数の火口が点在している。
これが、あばた面を作っている。

富士山頂の噴火口
（飛行機の中より撮影）

「丸尾」って何…？

８６４年、長尾山周辺が突然噴火し、大量の溶岩が噴出した。それが青木ヶ原を埋め尽くした貞観噴火だ。
当時、富士山は割れ目噴火が度々起こった。北西から南東にかけて山が割れ、その割れ目からマグマが噴出したのだ。延暦噴火や貞観噴火がそれだ。その新しい溶岩流を「丸尾」と呼んでいるのだ。富士山の溶岩は、元々粘り気の少ない、サラサラした玄武岩なのだ。数10ｋｍも流れ下った三島溶岩や猿橋溶岩がそれだ。だが、「丸尾」と呼ぶ溶岩流は粘り気が少し違う。マグマに含まれる二酸化珪素が多いのだ。二酸化珪素が多いと、粘り気が出てドロドロしてくる。少ないとサラサラになるのだ。
「青木ヶ原丸尾」は、やや粘り気がある溶岩流だったようだ。当時、北部に流れ出した剣丸尾・鷹丸尾・檜丸尾や東部に噴出した印野丸尾も、同じ粘り気のある溶岩だったようだ。

「丸尾」という溶岩

溶岩は自然を変える

青木ヶ原に流れ下った溶岩流は、「セの海」という大きな湖を分断してしまった。
そして生まれたのが本栖湖・精進湖・西湖だ。だからこの３湖は、今も水位が同じだという。溶岩の下は、まだ繋がっているようだ。富士山は、まだまだ複雑怪奇だ。次回も探求してみたい。